

## 芸術・文化施設の価値 ーヘドニックアプローチを用いた分析ー

櫻井 廉

本稿では、芸術・文化に対する関心や支出が増加していることに注目し、芸術・文化施設として図書館を例に挙げ、公共財の定義を確認した。また、芸術・文化施設に関する公共財が有する便益についても検討し、その便益に含まれる価値の体系化と便益計測の手法の整理を行った。その結果、図書館のサービスは、公共財のうちクラブ財に該当する財であり、その価値は使用価値、未使用価値、不使用価値、外部性の4つに分けられることがわかった。それらはさらに複雑な価値体系を有しており、そこから発生する便益は直接便益・間接便益に分けることができる。直接便益と間接便益ではそれぞれで適切だと考えられる評価の手法が異なり、直接便益であれば表明選好法での評価が適切であり、間接便益であれば顕示選好法での評価が適切である。

本稿では間接便益に注目し、芸術・文化施設に関する間接便益の推定にはヘドニックアプローチが適していることを確認した。また、酒田市に建設予定の新図書館を含む新規施設に関する便益の推定を将来的に行うため、手法及びデータの活用方法を学ぶことを目的として、ヘドニックアプローチを用いた分析を行っている先行研究において対象となっている神戸市立博物館について追試を行った。その結果、先行研究と近い値を得ることができた。しかしながら、様々な問題からデータが完全に一致しなかった点もあり、今後の検討課題とした。